

沖

4 月号



差ぢらひ色

林 翔

キナエさん

日を得てはあこがれいろの冬花芽

傘に聴く囁き愛し春の雪

大き一片ありぬまことに春の雪

春雪に身を寄せ合へる蕾どち

私が「馬酔木」の新人として躍進したのは、昭和二十三年度からであるから、その頃でもあつたらうか。

八王子の水原家寓居（秋櫻子は戦災で神田の邸と病院を焼かれ、八王子に疎開していた）に「馬酔木」の新人達が招かれて小句会をした事があつた。やや遅れて私が門を潜つてゆくと、「あ、キナエさんが来た」と秋櫻子の声、私が相馬黄枝ファンであつたから小公子をもじつて小黄枝と綽名されていた事は知っていたけれど、キナエさんとまで呼ばれていたとは知らなかつた。

相馬黄枝は馬酔木賞も受けていた先輩であるが、句集も出さぬ内に世を去つたから、今では忘れられているだろう。しかし当時の私は「馬酔木」が届くと必ず黄枝の作品を書き写して私製相馬黄枝集のような物を作っていたのだ。綽名のキナエさんは、或る句会で披講者が女性と間違

よべ春雪明けての霽のやさしさよ

鶯の咽のん喉どよいかに震へるむ

高枝に這はへるは見えぬ蔦芽吹く

立つといふ言こそよけれ梅の下

枝揺らし梅が香揺らす鳥愛めくし

丘を越え差ぢらひ色の梅に返あふ

えて「ソウマキナエ」と言い、爆笑を招いたところから来ている。

先日、書棚で本を探していたら、

偶然、原稿用紙を綴じた私製「相馬黄枝集」が見付かった。若干を抜粋しよう。

棄てし湯の路ゆでし湯のほふなる

夕蛙をしへられたる道あらず

母食かうへ誰かれのうへ言ひ別る

障子貼りし夜はあかあかと灯しけり

灯のとどく雪に降る音ありにけり

青梅のいつのほどより日おもてに

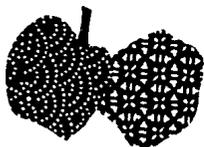
紀元節小さくなりし国たふと

夜の秋よ音といふ音われとあり

手を洗ひをへて思ひぬ春めくと

梅雨の月照つてもみせてなかなかに

林 翔



梅月夜

能村 研三

登四郎と校歌

今年の「市川の文化人展」は、市川の文化の礎を築いた彫刻家の藤野天光氏と作曲家の村上正治氏の二人を取上げ紹介した。

イベントの最後を飾ったのは、村上正治記念コンサート¹で、村上氏が自ら作曲した歌曲が披露された。その中の一つの企画で村上氏が作曲した校歌が、その学校の生徒たちの合唱で演奏された。柏井小学校の校歌は、能村登四郎の作詞で、初めてこの歌を聞くことができ嬉しかった。

百鶏の賑はひありて寒ゆるむ
仰ぎ見る真間の急磴淑気かな

明日立春海をつぶさに見渡せり

オカリナが縄文を呼ぶ梅月夜

やわらかな雲 ぬるむ水

そよそよと風 春の丘

古き歴史の姥山に

あかるい梨の花咲いて

学ぶ姿もいきいきと

わが学校へ今日も行く

この校歌は昭和五四年の四月柏井小学校が開校した時に合わせて作られたもので、父の現地への取材には私も同行したので印象深いものがあった。

柏井小学校は市川市の北部に位置し、鎌ヶ谷に近く、当時は水田や畑地が広がる田園地帯で自然環境に恵

貝寄風や櫓さばきにある膝力

涅槃図に適ふ照度となりにけり

腕立て伏せ地べたに尽きてあたたかし

耳の日は隠れ季語めくものなりし

もの食べるための眼鏡や春の暮

走る向き変へる野焼きの火の力

まれていた。近くには縄文人の住居があったとされる姥山貝塚があるなど、歴史的な史跡も残っているところだ。歌詞は三番まで続くが、三番までの一貫したテーマは「梨」で、春は「梨の花」、夏は「梨の袋」、秋は「実り」が詠まれていて、四季折々の変化の鮮やかな環境の中で子供たちがのびのびと生活することを願って作られた。

ところで、このあたりは桜の花が終わり、一週間も経たないうちに梨の白い花が咲く。梨棚に沿って満開となる花は、辺り一面に甘い香りを漂わせる。ムクドリが花をついばみにやってくる頃になると、家族総出の授粉作業で忙しくなる。当時よりだいぶ都市化が進んでしまったが、梨畑だけは今も多く残っている。桜とはまた違った、白い雲を敷きつめた美しさはすばらしい。

能村登四郎の作詞した校歌は、他にも五、六校あるようだが、毎日多くの生徒たちに唄い継がれているのだ。

能村 研三



蒼茫集

泪 壺

北川英子

藤村真理さん

寒波引き連れてからりと受賞せり
凍滝の一縷こぼるる泪壺
囚はれびとめきていづれも氷柱窓
日の目見しその日に摘まれ露の臺
涅槃像 御衣一枚掛けたかり
いつ降りて止みしや薄ら春の雪

おろしたて

藤原照子

東京の雪吊が雪招きけり
待たることもうなき家路冬銀河
なまはげの藁沓の今おろしたて
何処よりのじよんがら夜の雪の底
つららごとせり出す宿の雪廂
地吹雪や南部津軽と隔てなき

野 火

酒本八重

野火敵意あるかに筋を違へけり

応と声かけて田打のはじまれり
野火守にちよつと挨拶して行きぬ
越生毛呂古き駅舎や梅どころ
おぼんです臙をひいてすれ違ふ
陽炎の土手はみ出して踊りけり

寒牡丹

鈴木良戈

新玉の写真の背筋伸ばしけり
弾初の紅ほのかなる妻の指
来し方や厚き氷の乱反射
虎の眼のラガー夕日へ突進す
雲を被て炎色失ふ寒牡丹
寒雲の動かず初志を貫けり

紅梅

上谷昌憲

犬抱いて猫かぶりをる裘
冬うらら誰も渡らぬ歩道橋
口先を揃へて柳葉魚もどきかな
元力士真昼の鬼をやらひをり
紅梅や夕樹なら斬る人数多



潮鳴集



小豆粥

中新井みつ子

付睫抽出しにあり梅ひらく
干魚に薄日の差して梅二月
仏壇の母よりも老い小豆粥
背伸びして春立つ空に触れしかな
気弱さを風に知らるる冬牡丹

歌 枕

秋葉雅治

冬芽まだ朱のふくらみは秘中の秘
凍ゆるぶ滝の水嵩の糸目ほど
途中から雛の眸になる人形師
歌枕はた波まくら関の春
春あ^{永平寺}げぼの坐して揺るがぬ青つむり

余生とは

伊藤真代

裸木の何れも孤高余生とは
雪暮らし住めば都と妹の

嶺みはるかす冬耕の人ひとり
はなれ星孤独にさせぬ冬満月
羽織らせて高僧めける老夫かな

耳 袋

清水公治

髭剃つて冬籠りには惜しき顔
耳袋きこえぬ顔で聞いてゐる
鯛焼を持つ役得に手の温み
寒玉子一個の早番出社なり
つらつらと日を溶かしをり軒水柱

手 品 師

宮坂恒子

幼子の指は手品師初笑
一尺は美しき丈寒の芹
アイゼンの烈風を踏むぴしと踏む
ほのぼのとのぼりくる血や齋粥
土踏まずよろこばせ春耕せり

沖作品



能村研三 選

凍返る川に背骨のありにけり
急ぐなよ生き急ぐなよ二月尽
春寒や想ひ告げてはみしもの
私心なきほど冴返る真夜の耳
春浅く未だ甲虫の如くあり
凍てついて力を溜むる山河かな
一枚の空翻し寒波来る
太陽が道草をして春兆す
広角に立春大吉の日なりけり
明るくて悲しくなりぬ花菜畑
白鳥来雉もむやうな湖の風
寒天の干されて空の真つ四角
染め糸の雫むらさき寒の晴
結氷の山湖に神の渡り疵
兜煮の鯛の目こぼる寒の明
凍裂の音ひびきくる禁猟区

川崎 菅原 健一

諏訪 矢崎すみ子

茅野 高橋あゆみ

江別 梶川智恵子

深雪晴鵜の波打つかげ走る
雪やんでみんなまあるくなりし景
鬼は外男の子裏声惜しまずに
篆刻の切先寒の日を聚む
行了へし僧の白哲木の芽張る
白鳥の沼吹晴れて遠つくば
釣釜のゆれ納まらず利休の忌
大銀杏根の瘤なべて千葉笑
鴨汁を吹いて印旛の風をいふ
希望とは地に這ふ姿仏の座
春の土本降り吸つてふくらんで
薄氷割れば割扱の国境
初ふいごぬくみ洩れくるむしこ窓
雪しづる深山はひとを虜にす
火は風を風は火を呼び大野焼
初泣の嬰を存分泣かせおく

浦安 谷口みちる

千葉 廣島泰三

中津 吉武 千束

茨城県 今瀬 一博

初湯して赤子の五指のそつとひらく
 勝ちすぎの独楽引つ込めてしまひけり
 白浪は抗ひに似て結氷湖
 一本の筋をのこして涸き川
 海滾る日に水仙の匂ひたつ
 生きるものみな湯気となる初日かな
 海の音少し途絶えて寒椿
 牡丹雪指なめるとき指の味
 磯桶にほのと紅さす寒海鼠
 一と声に大鯪鱈を糶りおとす
 炉話のみんな時効にしてしまふ
 肩力抜き凍滝のゆるびそむ
 白鳥の帰心や北へ首伸ばす
 顔ちあふ日溜りわれと寒すずめ
 保線夫の黙へ二月のつむじ風
 初茜白壁しんとひき締り
 初春や生き様を知る阿六櫛
 白足袋の指先までも意志通す
 声変りの面輪きりりと御慶かな
 逆しまに浮力を恠へ餌採鴨
 冬芽はやひかりを蔵す毛を纏ひ
 己が手の磁力を信じ歌がるた
 寒林を抜け来し老の背に力
 風花の唇にきて暮れにけり
 寒釣や竿の拳に息かけて

横浜 矢崎 昌

松山 渡部 義雄

八千代 富川 明子

茅野 矢崎いと子

習志野 鈴掛 穂

八千代 深田 雅敏

薄紙のやうな昼月寒牡丹
 雨粒のひかり溢れて枇杷の花
 読初は『羽化』の一句を声に出す
 列柱の等間隔に淑気たつ
 葉牡丹の渦に紛るる薄日かな
 春めくや星座を結ぶ糸ゆるび
 寒晴や転居先にも富士見坂
 モノレール音無く過ぎて雪催
 月冴えて闇に浮力のあるごとし
 人減りし村に氷柱の数減らず

市川内山 照久
 東京高木 嘉久

新人賞予選句（四月）

急ぐなよ生き急ぐなよ二月尽
 凍てついて力を溜むる山河かな
 白鳥来雉もむやうな湖の風
 凍裂の音ひびきくる禁猟区
 篆刻の切先寒の日を聚む
 大銀杏根の瘤なべて千葉笑
 火は風を風は火を呼び大野焼
 初泣の嬰を存分泣かせおく
 一本の筋をのこして涸き川
 炉話のみんな時効にしてしまふ

菅原 健一
 矢崎すみ子
 高橋あゆみ
 梶川智恵子
 谷口みちる
 廣島 泰三
 吉武 千東
 今瀬 一博
 矢崎 昌

沖作品 選後句評

*
能村研三

急くなよ生き急くなよ二月尽 菅原 健一

最近「生き急ぐ」という言葉がしきりに使われる。小説の題名になったせいもあるのか、現代社会のシステムが全てスピードをもって走りつづけているため、こんな言葉が自然と使われるようになったのかも知れない。この句、生を見つめつづもあくせくした世の中で年齢を重ねる時間の推移に目をむけようとしている。昔は「人生五十年」といった時代もあったが、今は「人生八十年」時代、全速力で走り抜けなくても、もっとゆとりをもって生きようと思ふのだ。二月というのは、日数が少ないことと季節が冬から春へ大きく移ろうとしている時期でもあることから自らの生への感慨を深くする時期でもある。

凍てついて力を溜むる山河かな 矢崎すみ子

凍てつくような寒さの中、植物の生育もなく動物の姿も見えない風景。岩の黒と雪の白、剥き出しになった岸壁に半ば氷と化した雪がへばりついている。吐く息も白いというより、そのまま凍りついてしまいそうで、肺を満た

す空気も何か刺すような痛さを覚える。太陽の光さえ厚い雲に覆われて凍りつくような山河の風景で、動植物などの息づかいが全く感じられない。しかしそこに湧き起こるのは、その荒涼とした風景から喚起される作者自身の心の力そのものである。

白鳥来 雉もむやうな湖の風 高橋あゆみ

高橋さんは茅野にお住まいの方であるから、この湖は当然諏訪湖だろう。冬の諏訪湖は御神渡りで有名だが、諏訪湖に注ぐ岡谷市の横河川や茅野市の上川には白鳥が飛来し、その優美な姿を楽しませてくれる。諏訪湖は全面に鏡を張ったように結氷し、湖面は雪で覆われてまっ白な銀世界は目にもまぶしい。二月に入ると諏訪湖の水も次第に溶けて湖面を白鳥が悠然と滑るように行き来する。しきりに水の中に顔を入れ羽づくろいをする姿も見られる。北へ帰るのは三月の半ばころだそうだが、シベリアへの四千キロの旅に向けて朝日の中を隊列を組んで飛翔の準備に入る。この句中七の「雉もむやうな」という表現が山々に囲まれた静かな湖で白鳥の羽はたく姿を捉えている。

凍裂の音ひびきくる禁猟区 梶川智恵子

梶川さん北海道から参加されている方で、まだ入会間もない。凍裂という言葉は聞き慣れない言葉だが、樹木の幹が急激な寒さのために大きな音とともに縦に割れる現象で、北海道のトド松や杉の木で見られる。樹幹の水分の多い辺材が凍って膨張し、その外周部の樹皮が収縮するためにおこると言われている。表面が鉛直方向に長さ一メートルを超えるものもあるという。これは「へびさがり」などと呼ばれているようだが、自然がそのまま残された禁猟区ならはることか。都会人には想像もつかないほどの寒さであることがわかる。(以下略)